

# 陶遊



2005年3月1日発行第481号増刊  
昭和45年7月26日第3種郵便物認可  
盆栽世界3月号増刊

63 <sup>2005</sup> March

あなたもできる陶芸誌

特集

花の絵付け

桜・チューリップ・小花文様を描こう

ドリツパーの秘密

おいしいコーヒーを淹れるには

穴窯で初めての  
唐津に挑戦!

憧れの「唐津」を、穴窯で初めて焼成した虚空窯陶芸教室。唐津特有の短時間焼成という安心感に思わぬ落とし穴があった。その全貌を紹介しよう。

## 虚空窯 (千葉県印西市)

焼成指導：白次文治郎

参加者：虚空窯陶芸教室の生徒有志

報告：菅原 誠

※窯焚きから窯出しの模様、作品に対する講評や反省点については87ページを参照していただきたい。



火前にあり、へたった作品



銘々皿 (朝鮮唐津) 各径13cm 横野美佐子  
変化に富んだ色合いで喜んでます



中皿 (絵唐津・唐津釉) 径27.5cm 増田久子  
絵唐津のできあがりたへん満足しています



角皿 (朝鮮唐津) 径14cm 下村ひろ子  
初めての穴窯でしたが、変形してしまって悲しい結果です



## 朝鮮唐津釉・絵唐津作品ほか



小鉢 (朝鮮唐津) 高さ6cm  
上本晃子  
初めての穴窯。釉葉の流れが思いもかけない景色となりました



裏面

## 虚空窯で唐津を焼く

茶道でも「唐津」の茶碗は高い評価を得ています。実際、手にとって見るとその風合いはなかなかのもので、しかし唐津の土を用いて電気窯で焼いても、その風合いが出ないのは備前や信楽と同じです。

虚空窯（穴窯）を持つ白次陶芸教室では、過去4回、主に信楽の土を用いて焼き締めの作品を作ってきました。その中で白次先生は、唐津も何とか穴窯で作ってみようと、前回の焼成時に温度が低い所



窯出しが無事に終わって、参加者全員で乾杯！

に唐津の土で作った作品を置いたのですが、完全にヘタって、お椀が板になってしまいました。

やはり、唐津は唐津の温度に合わせた焼成をしなければなりません。そこで今回は、唐津のみの焼成を計画しました。

唐津は釉薬をかけ、短時間の焼成で済むということなので、12月25日〜26日の2日間を予定しました。温度が前回より低く、かつ期間も短いということなので、当初から多くの人に楽勝ムードが漂っていました。しかし何が起るかわからないのが穴窯です。前回までの穴窯でいろいろ苦労をした人は気を引き締めていました。

### ■唐津を焼くための計画

薪松／約100束  
椶と桜／約100束  
煙突の高さ／レンガ部分から1m伸ばしてトタン巻き  
作品点数／313点  
土／「唐津単味」と「唐津・信楽赤」80・20  
焼成時間／15時間

### 女性パワー炸裂 男性は縁の下

陶芸教室に来るのは女性が多いのですが、穴窯焼成はやはり男性

が必要です。今回も男性陣は、前の月まで日曜日ごとに近くのゴルフ場から松をもらってきて薪割りをし、この唐津焼きのための準備をしていました。正に縁の下の力持ちです。

しかし実際の窯焼きになりますと、女性は細やかな気遣いをしてくれます。男性陣は酒を持ち込むのが関の山ですが、女性はお惣菜やちよつとしたご飯物、クリスマスなのでケーキなど、焼くことしか頭のない男性陣とは一味がちった演出をしてくれます。もっとも男性のなかでも、料理を持ち込んで宴会をするのだという意気込みの人もいました。いろいろな人がいて、楽しいのが白次陶芸教室の窯焼きです。一度この窯焚きを経験すると、次も絶対参加するというのがほとんどの人です。

虚空窯の中心である男性陣、おじさん連中は「酒と女と陶芸を愛する会」を結成して、穴窯を作った焼成までできました。酒と陶芸は分かれますが、なぜ女が入ったか分かりませんか？ 男性が女性を好きなのは特に否定しませんが、この陶芸教室の連中はまじめさとユーモアとが交じり合った人たちです。作ったお窯（虚空窯）は大好きだが、オカマは勘弁ということ

しかし名前を聞いて女性陣が黙っていません。今回、女性陣は男性と対抗して「酒と男と陶芸を愛する会」を結成することになりました。会長は教室歴がいちばん長い妹尾さんです。なんとなく男性陣が負けそうですが、今後ともよろしく願います。

白次陶芸教室には、女性は若い妙齢の方から、それなりの人までたくさんいます。「陶遊」2月号に載った、加藤さん（旧姓山岡さん）もそうですが、結構な美人がそろっています。かつては都内某所に勤めていた、ものすごい美人も通っていました（この女性はその業界でもかなり有名だったようです。スカウトがたくさんきたそうです）。が、当人はその気がなく現在はお店を経営しています。おじさんの中には、その色香に迷って家庭破綻に至るのが必至だということに彼女が辞めるまでしばらく陶芸教室に通うのをあきらめた人もいました。さて誰でしょう。

しかし男性は若い独身の方がほとんどいません。今回の唐津の焼成中にも、おじさんおばさん連中が話して、若い男性を勧誘しようということになりました。人生経験が豊富なおじさんおばさん連中の話を聞くことは有意義です。もっとも半分以上は無駄話ですが…。

美人や可愛い女の子もいますので、ぜひ日本の伝統である陶芸に興味のある若い男性は参加してください。

ちなみに私は茨城県の筑波近くから毎土曜日、車で1時間以上かけて千葉県白井まで通っています。虚空窯を計画した包容力ある先生や、すばらしい仲間と一緒に作陶できるのであれば時間など問題になりません。それに窯の焼成ごとにみごとに料理や珍しい銘柄の美味しい酒が飲めるのです。これは止めるといっても無理です。

## 窯の火入れ

今回の火入れは12月25日の午前8時に行いました。最初は桜や樫の木をくべて、最後の1100℃以上に松を使う予定です。煙突は前回より20cmほど下げました。しかし空気の引きは良好で、300℃、400℃と順調に温度は上がっていきます。25日はクリスマスなので、日ごろキリストとは何の関係もない人もケーキで祝っていました。

男性陣はもっぱら酒で、浦霞の大吟醸、純米吟醸などを持ち込んで楽勝ムードで窯番をしています。夜の8時ごろから宴会を始め、そこかしこでいろいろ議論や人生論に話の花が咲いていました。

もつともあまり酒を飲みすぎて何を言っているのか分からない人が2〜3人いましたが、楽しいひと時でした。

女性陣もケーキをたいらげた後は酒盛りに参加していました。職場や近所、家族とは異なる人といういろいろな意見を交わして有意義？だったと思います。

窯のほうは1100℃あたりまでは、まったく何の問題もありませんでした。夜中は1100℃〜1200℃を保つということになっていましたが、これもほとんど問題なくできました。

何人かはお酒と議論にまだかなりの勢力をさいていましたが、今までの各人の経験から誰かが窯を監視するということは守られていました。ただ燻きを少しずつ掻き出すということはまだ徹底できていなかったようです。ときどき掻き出しすぎて温度が下がってしまふという状態がありました。薪も、一度にどきと入れるのではなく、少しずつ何回も入れることが必要ですが、このあたりも徹底していなかったようです。

今回はマニュアルを作って、窯の横に置いておこうと思います。趣味といいながら工場での仕事のような雰囲気ですが、やはり良いものを作るためにはそれなりの努力

力が必要です。毎回初めての人が参加しますので、簡単に分かりやすい作業標準が必要でしょう。

さて12月26日の朝になって、先生は徹夜の疲れから眠ってしまいました。宴会をひきずっていったおじさんやおばさんは帰ってしまつて、いちばん頼りになる吉崎さんが、がんばって窯番を続けていました。彼は大手化学会社のユ一テリテイ（ボーイラ）を経験したことがあり、基本的なことが非常に大切であること、何事も決められたことをこなすことが重要であることをはっきりと認識している人です。このような人がいるから何とか焼成ができるのです。おつと、宴会を楽しんだ人をけつしてけなしているわけではありません。我々はプロではないので、楽しみの部分は絶対必要なのです。またいろいろな人と話合うことは素晴らしいことです。いろいろな人がいて作品ができ上がる。それが大切なのです。

10時から1250℃に上げるころになっていましたが、1200℃までしか上がりません。いろいろ工夫をするのですがだめです。吉崎さんの話では夜中に雑木（桜や樫）でも最高1230℃まで上がったということ、松を止めて樫に変えて燃やすことにしました。

実はこれらの松は伐採してあまり時間がたっていないため、十分乾燥していません。樫は6カ月間乾燥していたのでその差がでたと思われまふ。

しかし樫でも1250℃までは上がりません。そこで昔の松が残っていたので、この松を用いて焼成を行いました。そこで初めて1250℃〜1270℃にすることができました。結局1250℃になったのは13時からで、20分ごとに先生に窯の中をチェックしてもらって14時に窯を閉めました。

分かっってしまったら前なのですが、薪の乾燥度合いは高温になると確実に影響するということを実感しました。また、温度が上がらない時は、どうしても薪をいっばいくべたくなるのですが、やはり温度は上がりません。あせらず、乾燥した薪を少しずつくべるといふ、これも当たり前のことですがきわめて重要であることを改めて体験しました。

1250℃あたりでは完全に酸化焼成となっています。いわゆる煤切りですが、今回は今まで以上にうまくいったと思います。

## 窯開き

年が明けて、1月10日に窯開きを行いました。当日は3連休の人

も多くいたのですが、多数の参加がありました。

さて窯を開けてみますと全体に光沢があります。信楽の焼き締めと異なり、釉薬をかけているので当然といえば当然ですが、第一印象は「テカっているな」ということでした。

窯から作品を出して並べてみますと、前のほうの作品は割れたり、変形したりしているのが多くありました。とくに薄く作られた作品はほとんど変形しています。前のほうの作品を指ではじいてみると磁器のような音がします。温度が少し上がりすぎた感じです。いっぽう後ろのほうは釉薬が未熔融のものもありました。

最高温度にするときに、できるだけ温度が上がり過ぎないように気をつけたのですが、結論として、窯の中の温度差が予想以上に大きかったと思われます。今までの信楽では長い時間をかけて焼成したため、全体の温度はほぼ均一になったと思われるのですが、今回は時間が短かったため、温度差がついたまままで終わったのでしよう。もう少し時間をかけ、じっくりと温度差が少ないように注意して焼成するべきであったと反省しています。また、今までは初回を除きゼーゲルコーンを用いていませんでした

が、次回からはいくつかの場所に置いてチェックしておくべきと思いました。

今回はゼーゲルコーンの代わりに、唐津で茶入れを作つてそれを窯の前面に置き、これで確認をすることにしてみました。最後の昇温の時に薪の投入口から確認したところ、へたつていました。それで温度は十分（上がりすぎた）と判断したのですが、後ろはまだ温度が上がっていませんでした。

### 作品の焼き上がり

今回、焼成した作品の多くは唐津と信楽の赤土を混ぜたものです。唐津だけでもよかったのですが、作陶の時にひびが入りやすいので赤土を混ぜました。そのためか、色が少し濃く出ています。釉薬は朝鮮唐津、長石釉、藁灰などを用いました。

先にも述べましたが、今回は窯の前面、後部ともうまくいかなかった部分がありました。自分の作品がうまく焼けなかった人はかなり不満だったようですが、失敗はつきものです。次回に期待しましょう。今回は熔けやすくした釉薬を掛けて窯の後ろに置くといった対策が必要です。

今回の窯出しの中ですばらしかった作品のひとつが増田さんの絵

唐津です。先生の作品ではないかと一瞬思ってしまうほど形がよく、大胆で勢いのある筆使いがみごとに作品となっていました。変形もしていません。

上本さんの朝鮮唐津の茶碗は藁灰の流れと色合いがすばらしい感じでした。薄かったためか、少し変形しましたが、それが自然で、いい雰囲気です。

小泉さんの板皿も朝鮮唐津の色合いがうまく出て、すばらしい作品となりました。板皿は別の場所にもあったのですが、発色が異なります。やはり窯詰めの際位置によってどうしても差が出てしまいました。彼女は日ごろの行いがよかったのでしよう。

次回からは場所の取り合いになるでしょう。ただし、場所が同じでも毎回同じように焼きあがるとは限りません。日ごろの行いに気をつけましょう。

### 今回の反省点

今回の反省点をまとめますと以下のようになります。

一、窯を1200℃以上にするには、十分に乾燥した松が必要である。

二、熾きの掻き出しは少しずつ、薪をくべるときも少しずつ丁寧に。行く。

三、穴窯の温度差はかなり大きい。短時間で焼き上げる時はその影響がかなりのものになる。

対策・窯の温度調節をもつと厳格に行う。誰が行っても失敗しないような薪をくべる手順書を作る。ゼーゲルコーンを設置する。

四、程度の差はあれ、穴窯は温度差が避けられない

対策・後ろのほうの作品の釉薬は低温度で熔ける釉薬にする。

五、唐津十赤土ブレンドの作品の色合いは少し濃い。

対策・唐津単味で成型する。唐津と白土のブレンドで成型する。

六、その他。穴窯の作品は繊細な作品よりも豪放、野趣、変化に富んだ作品に特徴を求めたほうがよさそう。したがってあまり薄作りは避けて、さつくりとした厚さを持つほうがよさそうである。

.....  
この記事が雑誌に載るころに反省会と称して一杯飲む会が開催されると思います。おそらく、楽しい反省会になるでしょう。我々が誇るのには、けつして後ろ向きにならない陶芸教室の仲間です。どこかの評論家が、作品にはその人の刻んだ歴史が表れると言っていました。我々は稚拙でも、希望を持った作品を作り続けていきたいと思っています。

## 長石釉作品



湯呑み（長石釉）高さ10cm・8cm 伊藤 冬  
唐津の雰囲気が出せたと思います



徳利（粉引・長石釉）高さ12cm  
倉田和幸  
白化粧をして素朴な雰囲気が出せました



湯呑み（長石釉）高さ10cm・8cm 伊藤 冬  
唐津の雰囲気が出せたと思います



湯呑み（長石釉）高さ8.5cm・9cm 庄司妙子  
釉葉の一部が温度不足で熔けなかったが、雰囲気は素晴らしい

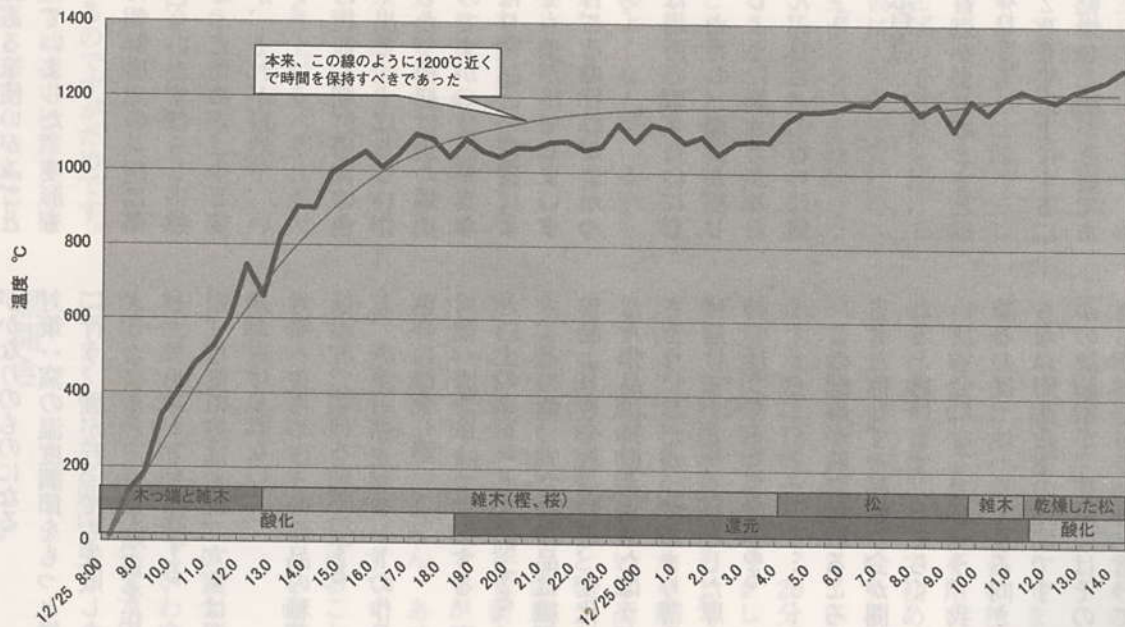


角鉢（長石釉）各径16cm 小林静子  
初めての参加です。一つは釉葉が味熔融ですが、他は良かった



茶碗（長石釉）高さ8cm 松本幸四郎  
テーマは「地球と宇宙」。色合いが優しい薄い藤色に仕上がりました。口縁の傾斜もよく、傘寿の母への贈り物になりました

### 平成16年12月穴窯焼成温度記録





深鉢（絵唐津・唐津釉）高さ11cm 増田久子  
絵唐津の出来上がりにたいへん満足しています



ぐい呑み（紅志野）各高さ5cm 松本幸四郎  
テーマは「山と溪谷」です。火山の風景ができました



ぐい呑み（朝鮮唐津）各高さ7cm 岩田桂子  
変形してしまいました。ちょっと残念



花器（朝鮮唐津）高さ25cm  
山田均  
唐津の趣きが出て良かった



湯呑み（朝鮮唐津）高さ9cm  
松本幸四郎  
色合いが写真より渋く、落ち着いた感じになりました。お茶とよく合います



皿（朝鮮唐津）各径12.5cm 高田奈緒子  
初めての穴窯です。すごく満足しています



銘々皿（朝鮮唐津）各径13.5cm 木村真由美  
初めて穴窯の作品を手になりました。すてきで感激しています



ぐい呑み（鉄赤釉）各高さ5cm 松本幸四郎  
感激！鉄赤釉に灰被りした部位が金彩風に変化しました



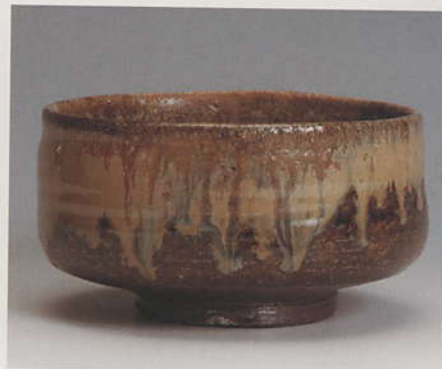
銘々皿（朝鮮唐津）各径12cm 小泉春江  
穴窯は難しいのですが、気に入った作品になりました



抹茶茶碗（朝鮮唐津）高さ6cm 阿部良子  
初めての穴窯。良い作品で気に入っています



抹茶茶碗（朝鮮唐津）高さ7cm 山田均  
唐津の趣きが出て良かった



抹茶茶碗（朝鮮唐津）高さ7cm 菅原誠  
少しへたって低くなりましたが、許容範囲です



長皿（朝鮮唐津）28.5×17cm 白次丈治朗  
藁灰の量が少し足りなかったが、気に入っています



深鉢（絵唐津・長石釉）各高さ11cm 白次丈治朗  
うまくできたと思っています



銘々皿（藁灰釉）各高さ2cm 本間富滋子  
初めての穴窯です。温かみのある作品になりました



角皿（藁灰釉）径22cm 日下美恵子  
白化粧とベンガラで気に入った作品に仕上がりました

## 藁灰釉作品



平鉢（藁灰釉）径19cm 岩田光治  
熔けが十分でないのが残念



片口・ぐい呑み（藁灰釉）高さ8cm・4.5cm×3 吉崎幸孝  
釉薬が熔けきっていない。残念



片口（藁灰釉）径25cm 高橋みどり  
藁灰が付きすぎました。残念です





鉢（藁灰釉）高さ15.5cm **大山和美**  
熔けが悪く残念な結果でした



湯呑み（藁灰釉）各高さ8cm **藤本みどり**  
熔けが足りずに悔しいけれどもいい思い出です



茶碗（藁灰釉）高さ8cm  
**梶山富士子**  
釉薬の熔け具合が悪くて残念な結果です



鉢（藁灰釉）高さ5cm **近藤生**  
穴窯焼成も、作品も気に入っています



中鉢（藁灰釉）高さ15.5cm **桜庭さかえ**  
藁灰の感じが良くて気に入っています



深鉢（藁灰釉）高さ10cm  
**伊藤ふみ**  
藁灰が意外な感じになりました。  
思いとは違うのですが……



小鉢（灰釉）各径16.5cm **長堀良男**  
少し地味な仕上がりです

## 灰釉作品



鉢（藁灰釉）高さ7cm **井上靖子**  
熔けがもうひとつ足りません



茶碗（灰釉）各径13cm **山岡千春**  
変形が大きくて、穴窯の難しさを実感しました



湯呑み（灰釉）高さ8cm・10cm **小野泰一**  
黒泥の練り込みが思いのほか良い景色となりました



湯呑み（灰釉）高さ8cm **近藤生**  
穴窯焼成も、作品も気に入っています